管野 奈津美
KANNO Natsumi

陶と襞　作品「Marginal」及び研究報告書
Ceramic Art and Fold Work "Marginal" with Research Paper

デザイン学領域群 クラフト領域

Marginal 01
W30×D30×H37
陶
2012

Marginal 03 W30×D45×H28 陶 2012

Marginal 02 W30×D30×H37 陶 2012

序

襞(ひだ)といえば、何を思い浮かべるだろうか。衣服や布地につく細長い折り目、しわ、地層の重なり…。自然の中にひっそりと存在する木の樹皮にあるひび割れ、葉っぱの表面にあるしわ、きのこの傘の裏にある襞—。また、物質的に存在している襞とは別に精神的な意味合いで「心の襞に触れる」という抽象的な表現として使われることもある。

私はタタラ(陶板)による襞の表現に惹かれ、「襞」をテーマにした作品を制作してきた。陶による襞の表現とは何か。しかし、陶芸の世界ではタタラを使った制作手法が限定的である上に、現代陶芸において様々な作家が「襞」を表現しているにも関わらず、「陶における襞の表現」について論じられていない。様々な作家の造形論を検証することによって、タタラの未知の可能性を探るとともに現代陶芸における襞の表現とは何かと考察することがこの修士論文の目的である。

第一章

土という素材と向き合うということ

陶芸において手びねりや轆轤、型成形等様々な手法があるが、改めて土という素材を見つめ直し、土という素材と向き合うことはどういうことかを考察した。特に手びねりにおいて、土という素材自体が時間やリズムを持っており、それとどう関わっていくかが重要になってくる。そして手びねりでかたちを立ち上げた後、乾燥そして焼成へと進む「土から陶へ」のプロセスの中でゆがみや切れ、割れなどが起こり得ることもあるが、それらは素材である粘土の必然的現象といえる。素材の性質を理解し、素材が持つリズムと自分の手びねりのリズムが一致したとき、新しいかたちが生まれてくる。

第二章

タタラの未知なる可能性を拓いた作家たち

板状の粘土を「タタラ」といい、これを使って形づくるのをタタラ成形と呼ぶ。タタラ成形は角瓶やタイルなど広い面が使われるのが伝統的であったが、一枚板のタタラで空間を包み込んだ滝口和男、タタラを積み重ねる行為によってタタラの切り口を見せる肥沼美智雄、タタラをパーツとして捉え焼成時に起きるへたりを生かした清水柾博など、現代陶芸においてタタラを様々な方法で斬新的に取り入れてきた作家がおり、彼らの作品を通してタタラの新しい可塑性について考察した。手びねりや轆轤に比べて、手で土を伸ばしたり叩いたりするというタタラの原始的な手法が土に味わいのある表情をもたらすことを示している。

第三章

陶において襞を表現するということ
—陶芸作家論

これまで襞を表現してきた作家を取り上げ、彼らの作品や襞の表現に対する考え方を考察した。作品を削いで省かれるはずの存在である屑に着目し、磁土を薄くスライスし、それを表現した伊藤公象、土の皮を意識するうちに襞が生まれたという伊村俊見、土の表面を焼くことで土の襞を表現した秋山陽、轆轤を立ち上げた器に襞をつける小池頌子、土が薄くのびた前餅のようなヒダ状の形を貼って重ねる田中知美、これらの陶による「襞」を表現してきた陶芸家たちは、技法や表現方法は様々といえども、襞に惹かれ、襞の表現と土の特色を融合させた新しい世界観を生み出している。

彼らの作品を検証した結果、彼らに共通するのは「襞」という、はかなくも同時に生命が息づいているという微妙なラインで揺れ動いている概念に惹かれている。そして襞を表現するために土という素材を選択したのでなく、土という素材と向き合ううちに、または土の薄い表情に惹かれて襞を表現するようになった、つまり「土から陶へ」というプロセスを経て成り立つ「襞」に惹かれたという点である。よって陶による襞の表現は土の素材と自然的な概念が上手く組み合わさった表現であるともいえる。

第四章

自分とヒダヒダシリーズ（修士制作報告書）

この章ではここまでの考察を通して自分が制作してきた作品を振り返るとともに、何故自分が「襞」に惹かれてきた理由をまとめた。そして修士制作「Marginal」に至るまでの経緯を述べた。

終章

陶と襞の関係は密接し合っており、「土から陶へ」というプロセスを経て「襞」と成り立つ事ができ、そのプロセスが襞をよりいっそう際立たせているのではないかと考えた。

結論として、陶において襞を表現することは、「生きる」ことを問うことである。生と死、生きているけれど同時にはかない、脆いけれど同時に力強い。そこに、生命の存在と喪失が同時に存在しており、人間的本質が含まれている。はかなさと力強さを同時に持ち合わせながらも、生命体のリズムがそこに息づいているかのようである。生命のあるものはいずれすべて滅びる。自然の中に存在する襞もいずれも消滅していく。しかし、陶による襞は不変であり、まさに人間の生きる自然世界の縮図としてその生命のはかなさを物語りながらも、永遠に存在し続けていくだろう。